



Title	<翻訳>中世英國ロマンス Eger and Grime試訳(1)
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1987, 15, p. 151-164
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99243
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世英國ロマンス *Eger and Grime* 試訳（1）

金山 崇

英國中世ロマンスの秀作の一つとされる *Eger and Grime* は、15世紀中頃にスコットランドのフォース湾南岸の町、Linlithgow の辺りで書かれたとされる。この作品を現在に伝えるのは Percy Folio Ms. と17世紀後半から18世紀初頭にかけて公刊された三つの印刷本だけである。原作は伝わらず、異論もあるが原作により近いテキストを含むとされるのが、Percy Folio Ms. で、1650年頃に作られ、1474行の韻文から成る。その語形には後世にかなり変改を加えられた証拠はあるが、基本的には15世紀の英國北部方言で書かれている。この作品の存在は、1497年に二人の楽人がスコットランド王ジェームズ四世にこれを語って聞かせたという記録がその最初の証明となっている。

ここに訳出するに当たって、底本としたのは Percy Folio Ms. に依る W.H. French & C.B. Hale の版である。

作品の第一部である346行のうちに、主要人物が殆んど登場する。ペームの国の領主の一人であるブラガス伯爵と妻、一人娘のウィングレン、固い男の友情のきずなを表すエーガーとグリムの二騎士、禁断の国を守る騎士グレースティール、彼との戦いに傷を負ったエーガーを手厚く介抱する女性（これがルースペインである）がそれである。戦いに敗れ、ウィングレンに冷たくされたエーガーをグリムが如何に救って結婚させるか、エーガーに扮したグリムとグレースティールとの死闘、後者の敗北とその娘の運命、グリムとルースペインの結婚、などは第二部から最後の第五部までに譲らなければならない。

金　　山　　崇

昔ペームの国¹⁾にあったお話ですが、
その王国にひとりの領主がおりました。
冠を頂く国王を除けば
この人の令名が一番高かったのです。
この領主はその名をブラガス伯爵といい,
かんばせ美しい貴婦人をめとりました。
二人の間のお子は娘ひとりで,
世にこれほど美しいお方はありませんでした。
その淑女はウィングレンと申し上げました。
この女性^{ひとふくわ}, いっかな夫を迎えるとせず,
黄金を積まれようと, 財を積まれようと,
また高貴な血筋であろうと,
わが夫たる男は, 剣を取って戦えば
向う処敵なしの人物でなくてはならぬというのです。
その豊かな国には沢山の男がおりましたが,
このような人物は探してもほんの僅かでした,
伯爵はこういった勇猛果敢な領主や騎士の一軍を
率いてはおられるのですが。
その頃のことです,
サー・グリムなる名の立派な騎士がいて,
ガリックの領主をしておりましたが,
彼は思慮も分別もある人物でした。
さて, 頃も同じなら所も同じく,
エガースと人の呼ぶ年若い騎士がありました。
が実の名はサー・エーガーというでした。
彼は財産もない騎士候補に過ぎませんでした。
というのは, その兄がいて,
父親の領地をすべて治めていたからです。

5

10

15

20

25

中世英国ロマンス *Eger and Grime* 試訳 (1)

エーガーは筋骨たくましい偉丈夫でしたが,
広い領地などはひとつも持っていたなかったのです。30
でも、彼はその光り輝く甲冑の誉れによって,
名を挙げることを片時も怠りませんでした。
そして、身につけたかくも優れた武芸の腕を大切にして,
たえず馬上槍試合に出たり、戦ったりしたのです。
そしてこのように秀でた彼の腕の証が立ったので,
伯爵の娘はエーガーを慕うようになりました。35
この淑女が情けを寄せたものですから,
その父も早速、娘の気持に同意を与えたのです。
父伯爵は、娘がその気になって
男爵なり、また騎士候補なりを
伴侶に選ぶ気になってくれたのを40
喜んだのでした。
この二人の騎士、サー・エーガーとサー・グリム,
彼らはまことに友人の鑑ともいえました。
血こそつながっておりませんが,45
二人は良き盟友でした。
家で二人は室を共にして暮らしており,
彼らほど愛情を捧げあった人はいませんでした。
ある時のこと、エーガーはこれまでのよう
身に誉れを得たいと旅に出ることになりました。50
身分の高い騎士たちのだれよりも
高い称賛を身に受けたいと願ってのことでした。
こうしてある晩のこと、彼は家へ帰って来ましたが
ひどい手傷を受け、様子も哀れでした。
小刀は失せ、鞘は見えず,55
腰から下がった剣鞘は見る影もない有様でした。

金　　山　　崇

槍の柄はにぎっておりましたが、
それ以外何の武器も持っていないのです。
寝台の端に彼は腰を下ろしましたが、
大きく溜息をつくや氣を失って倒れてしまいました。 60
ガリックのサー・グリムはすぐさま起き上がり、
サー・エーガーのところへ走って行って言いました。
「ああ悲しや、エーガーよ、僕の手の及ばぬ
遠い所に君がいたのが悔まれる。
あちらの門で別れた折には 65
君はたくましく元気であったし、
身の繁栄にかけて誓うが、君は騎士として～
その武勇を示してくれるものに思えたのだ。
ところが今、君は蒼白く病人のような顔をしている。
これは激しい戦をして来たのだ。 70
君は激しい戦をして来たのだ。君はこれまで
生半な事では決してへこたれぬ人だったのだから。」
「いや僕の身に降りかかったような事は、
君の身にも、またほかに僕のまねをして
誉れを得ようと戦場に出かける騎士の方々の身にも、 75
二度と同じ事が起らぬよう
神様に願うものだよ。
苦労して僕は榮誉を得たが忽ち失くしてしまった。
國の外へ出ず、己が身に恥を招くことを避け、
その誉れに傷や汚点をつけぬようにしてきた 80
ほかの領主連中が、僕の目の前で
僕のいとしい人を手に入れることになろう。
なのに僕は重い傷を受け、
武勇の誉れはもう絶対に取り戻しができないのだ。」

中世英國ロマンス *Eger and Grime* 試訳 (1)

これを見てグリムはサー・エーガーに言ったのです。

85

「君の嘆きようは見苦しいぞ。

どんな見事な出立をしていようと、

また物々しい武器を振るっていかに腕が立とうと、

戦いの場で屈辱を味わわぬ者は一人だってないのだ。

その人の武勇の誉れがおとしめられたり、

90

奥方や思いの人が非を鳴らすわけがどこにあろう。」

エーガーは言ったのです。「よしてくれ、サー・グリム。

あの時僕ほど立派な甲冑に身を包んだ

キリストの騎士はいなかつた。

めざましい働きの出来そうな体格もしていたし、

95

十分それに似つかわしい武器も持っていた。

僕の駿馬は十分頼もしかったし、

だからいい立派な衣装も着けた。

腰の業物も十分頼みに出来た。

が何よりも僕は自分の気概と腕を信じていた。

100

大胆不敵な騎士がいて、

禁断の国を日夜守っていると噂に聞いていた。

海に臨むすがすがしい島があって、

高い塔を持つ城がいくつもあるというのだ。

そこへの川を渡るのに浅瀬が二つあって、

105

僕は即座にそのうちの一つを選んだ。

僕が禁断の国に入って

しばらく馬を進めると間もなく

耳に聞こえて来たのは、軍馬のひづめが

砂利を踏むような音だった。

110

僕の馬は自分を迎えるその音に喜び、

首を振り上げて、武者ぶるいをした。

金　　山　　崇

馬は掛け出さんばかりに身を構えた。

ひづめの音が高くなつたのを僕はじっと聞いていた。

行く手の目の前近くを見ると

115

栗毛に跨って来る一人の騎士が見えた。

その盾が赤色なら槍も赤色で、

甲冑は金一色にきらきらと輝いていた。

忍ぶ^{きだめ}運命の死にかけて誓うが、相手の馬に比べれば

僕の馬は子馬のように思えた。

120

相手は太くしかも長い槍を

悠々と胸の前にひっさげていたが、

僕は自分の槍を槍受けに載せて支えている始末だ。

僕は馬を好きに進むに任せた。

双方の馬は忽ち僕ら二人を引き合わせてくれた。

125

悲しや、その対決こそ僕には嘆かわしいものなのだ。

陣羽織も皮の上着も

胸当も鎖かたびらも

大小の甲冑一切も何のその、

相手は僕の体を見事に刺し貫いたのだ。

130

僕はそれでも鞍に留まっていた。

頼みの僕の槍も相手の胸に当たって折れた。

再び彼は向かって來たが、

打ち損じた挙句、僕の馬を殺してしまった。

そこで僕はすばしこく起き上がったが、

135

焦る心の半分も体はすばやく動いてはくれなかつた。

深手を負っていたのはともかくとして、

不幸な馬の仇を取ってやりたかった。

僕はきらめく剣を抜き、

件の騎士目がけて激しく向かって行った。

140

中世英國ロマンス *Eger and Grime* 試訳 (1)

体中の力をこめて打ってかかった。

僕は相手を打ち損じて反って彼の馬を殺してしまった。

事ここに至ると知るや、

彼は徒步^{徒歩}で立ち向かおうと奮い立った。

相手は剣を抜いたが、なかなかの業物だった。

145

僕の身に加えた最初の一撃を、

彼は大小一切の甲冑もものかは、

僕の肩へ七インチも喰い込ませた。

こちらも全身の力をこめて剣を彼の腰帯より上の辺りに

振りおろせば、相手はうめき声をあげた。

150

この一撃で彼の勢いを喰いとめたその一方で

すかさず僕はもう一大刀を見舞ってやった。

たしかに彼をやっつけたと思ったが、

その勢いで僕の剣が折れてしまった。

そこで小刀を抜いた——ほかに手はなかった——

155

これは実の兄からもらったものだった。すると

相手も小刀の鞘を払った。

こうして僕らはぶつかり渡り合ったのだ。

まず彼は僕の顔に傷を負わせた。

両眼は難を逃れたが、それは救いだった。

160

次に僕が彼の頭に一大刀見舞うと、

喰い込んだ刃が胃に残ってしまった。

やくざな僕の武器が、ことごとく駄目になったあの時の

落胆は、神に頼んでも騎士には味わわせたくないものだ。

だが手に残された柄で

165

彼の顔面を何度もなぐりつけたので、

血が鋼の胃の下からほとばしり出た。

彼の歯が何本か欠けたが、それがよくわかった。

金　　山　　崇

上等なミラノ産の僕の鎖かたびら,
これは父の形見だが,
それまで幾度の合戦にも
その環の一つだってはじけ飛んだことはなかった。
パリ仕立ての皮の上着も
肌着同様に役立たずだった。

170

彼の剣には見事な鋼が使ってあったからだ。
彼の大刀先は鋭く——それは深く喰い込んだのだ——
僕の大小一切の甲冑を物ともせず刺し貫き,
肉に喰い入ってやっと止まったくらいだった。
こうして戦ううちに疲れもひどく、気力も失せ,
体の血も棒切れさながらに乾上がりてしまった。
長い戦いに気も遠くなり,
相手と組み合ったまま僕は倒れてしまったのだ。
気が付くと僕の馬の姿がなかった。

175

その倒れた辺りの地面に目をやった。
少し離れた所で僕の馬は倒れて死んでいた。
その背は二つにたち割られていた。
その時流れる水音を耳にしたので
その方へ四つんばいになって行き,
目に入った血を洗い流した。

180

役に立ってくれるはずの物は一切なくなっていた。
それから僕の右手を見ると
小指がなくなっていた。²⁾
それから草地を先へ迎って行くと
僕らよりもっと激しく戦ったあとがあった。
殺された一人の騎士が甲冑を奪われた姿で倒れていた。
その小指もなくなっていた。

185

190

195

中世英国ロマンス *Eger and Grime* 試訳 (1)

その騎士を見て、同じ人物がその男も僕も
相手にしたことがよくわかった。

その時、鞍を置いた一頭の馬が目に入った。

そしてその傍に殺された一人の騎士が倒れていた。

200

彼の軍馬はなかなかの駿馬だったが、

僕の馬に比べれば半分の値打ちもなかった。

その日は一日馬を進めて、

やがて夕べとなった。

月は美しく照り、星は光を投げていた。

205

その時、城が一つ目に入った。

城と町とが見えたのだ。

そしてある庭園の脇で、僕は馬から下りた。

すると僕のいるすぐ近くに

見たこともないような美しい館の姿があった。

210

僕がしばらくそこを立ちやらずにいると、

一人の貴婦人が緑瑞々しい庭園から出て来た。

そのひとは、あの緑の庭園から出て来て

館の中へ入ろうとしているのだった。

緋色の衣にそのひとは身をまとい、

215

その髪は金一色にきらきらと輝いていた。

そのかんばせは、雨に咲くバラのように赤味がさして、

あんな美女にはかつてお目にかかったことがなかった。

そのひとが来て僕は元気が出たような気がして

背筋を伸ばし両の足で立ち上った。

220

『騎士殿』とそのひとは言った。『どうしてここに

じっとしておられるのですか。ゆっくりと体を休める

必要がおありでしょう。幸いこの近くに堅固な城があり、

大層腕の立つお医師がそろっています。

治療に支けた方たちで、
ふしぎなほどよく病を治す力をお持ちです。
それにそこには、頼って来た不幸な方には
それはとても情け深くして下さる貴婦人がおられます。
そこへ行かれるようお勧めします。あなたは
ゆっくりと体を休める必要がおありでしょうから。』

『ご婦人』とエーガー³⁾は言いました。『傷を負っての
この始末、どなたともいるのも私にはうとましいのです。
美しく優しいご婦人、お願ひです。お力添えによって、
ひと眠りして元気を取り戻させて頂き、私と私の馬に
しばしの休息を与えて下さいますように。』

『騎士のお方』とその人は言った。『及ばずながら
お力になりましょう。騎士の方、あなたと初めて
お会いしたのもご縁、あなたの難渢をお救い申したい
と存じます。』それから一人の美しい侍女が僕の軍馬を
連れ、馬屋の中へ引いて入ってくれたのだ。

そして僕はとある美しい明るい部屋へと
二人の美しい貴婦人に両側からつき添われて
招じ入れられた。血まみれの甲冑がみな脱がされると
先に話の貴婦人は早速僕の傷をたしかめてくれた。

そのひとは気付けに飲み物をくれたが、
僕が既に出血のため死にかかっていたからだ。

エールであれワインであれ、あの時ほどいい潮時に
飲ませてもらったことはかつてなかった。

そのひとはすぐに指図して、銀のたらいをもち、
そこへ湯を入れるようにと言った。
亜麻の衣まとう情け深いその貴婦人は、
色白の手で僕の手を洗ってくれた。

そして僕のあらわな右手がその人の目にとまつた時の
何たる惨めさ。身は恥ずかしさにますますくむ思いだ。

手袋は傷つかず、手には指が欠けて無かったのだ。

255

それを見て、僕が戦いに敗れたのをはっきりと
そのひとは見抜いたのだ。僕が恥じているのを見て
そのひとは僕の名をたずねようとせず、
そのことにはもう触れず、

僕は手を尽した親切な介抱をしてもらった。

260

それがすんで僕は寝台へ運ばれたが、
あの時の半分も安らかに眠ったことはかつてなかった。

かんばせ美しいその貴婦人は
寝台の端に腰を下ろした。

ソルクリー
ひざに弦楽器を置くと

265

そのひとはまことに美しい音でそれを奏でた。
だが甘美な弾奏なのに

幾度もそのひとは声をじっと抑えて嘆くのだった。

またその二人の侍女も、優しい声で歌うのだが、

幾度も涙を流し、手をもみしぶるのだ。

270

だがあのように甘美な弾奏に、あのように苦しげな
吐息が絶えずもらされるのは聞いたことがなかった。

夜になるとそのひとは幾度も僕を見舞い、

何か欲しい物はないかとたずねてくれた。

だが、ないと言い続けているうちに

275

夜明け近くになってしまった。

そこであのひとは、僕の血のついた包帯を全部はずすと、
また新しいのを傷口にあててくれた。

よく覚えていてくれたまえ、僕の傷に当てられた包帯は
安物の布地などではなかったのだ。

280

金　　山　　崇

それは亞麻布の類ではなく、
見事な上等の絹だったのだ。
僕の傷口に二度包帯をあてるのに
あの貴婦人には二十ポンドの出費が必要だった。

しかも僕の痛みを柔らげる香料や軟膏、
また僕の体に心地よく利いた飲物は別なのだ。
終ると角杯に飲み物⁴⁾をくれたが、
生まれてこの方、
あんな飲み物はもらったことがなかった。

飲み終えた僕をあのひとは手を出して支えてくれた。
あのひとがくれた飲み物は草のような緑色をしていた。
忽ちそれは僕の傷口のところに見えて来た。

出血が止まり、飲んだ薬がそこに入って
それまでの痛みがすっかり楽になった。
そうなると僕は立ち上がって走って、
あらためてまた戦いに立ち向かえる気がして來た。
緑の庭園では鳥がさえずっており、
僕は起き上がって動き回った。

その貴婦人は横になっている僕のところへ来て、
こう言ったのだ。

『もっとよくなつてお帰りになれるまで
もう一日、二日お留まりになつてはどうでしょう。』
だが僕は故郷へ戻りたくてうずうずしていたから、
どうしてもおいとまして帰りたいと申し出たのだ。
そのひとは僕にレンヌ⁵⁾産の肌着を二枚いっしょにくれ、
僕の肌につけてくれた。これがそうだ。
それから僕の着ていた肌着をその上に重ね、
血が付いたままの僕の甲冑をつけてくれた。

285

290

295

300

305

だが重い鎖かたびらはつけないでくれた。

310

傷口が出血せぬようにとの心遣いからだった。

乳のように白い手で、その貴婦人は

僕の鞄の前弓に、上等のワインを二本

くくりつけてくれたので、

それを飲んでずっと過ごして来たのだ。

315

僕は言った。『ああ、尊い優しいお方、こんなことが

一体あるのでしょうか。あなたはこの国随一の名医です。

私の傷は、大小もろともに

もう何の痛みも感じられません。

私の体はまるで剣や槍で傷ついたとはさらさら思えず、

320

また武器で損なわれたとも一向に思えません。』

『そうであって欲しいと願うものです』とそのひとは

言った。『でも一日、二日して、一度あなたの心が

恋にうずき出せば、もう

その油薬も利き目が失せて参りましょう。

325

私の許にお留まりなさらぬ積もり故、

私がして差し上げたい手当を

国許にいるあなたの思いの人にして頂きなさい。

そうすれば、傷も治まり立ち所に癒えることでしょう。』

実に僕が残念だったのは、僕には

その貴婦人に差し上げる物が何もなかったことだ。

330

でも僕はまだ新しい色鮮やかな純金の

光り輝くロザリオを取り出した。

そのひとはそれを僕の手から受け取ろうとせず、

僕はそれを寝台の脇に残して來たのだ。

その美しい貴婦人に別れを告げ、

335

昼夜兼行で馬を飛ばせた。

その間の旅も途中つつがなくはかどって、
国許へあと二マイル足らずの所まで辿り着いた。
ところがその途端、傷口が揃ってみなうずき出したのだ。
まるで短刀で方々の骨がぶち抜かれるようだった。
突然襲った苦しみに、僕は鞍から落ちてしまった。
われにかえってみると、僕の軍馬はいなくなっていた。
かの遠い國への僕の旅はこういう次第だったのだ。
既に話しのような大胆不敵な騎士が僕の相手だった。
世間ではその男をサー・グレースティールと言っていた。
彼の腕を試したが、見事な戦いぶりだった。」

340

345

註

- 1) ボヘミアを指すという説がある。
- 2) 勝者が敗者を識別するための手段であったと考えられる。
- 3) ここは、僕が言った、となるべきところ。
- 4) 薬が傷口に見えて来たら病人は助かると、中世では信じられていた。また飲み薬や軟膏に緑色のものが好まれた。
- 5) フランスのブルターニュ地方の地名。中世ではこの地方の首都であった。

参考文献

- W.H. French and C.B. Hale, *Middle English Metrical Romances*, New York, 1930.
 M.V. Duzee, *A Medieval Romance of Friendship: Eger and Grime*, New York, 1963.
 A.R.H. Moncrieff, *Romances and Legends of Chivalry*, New York, 1934.
 E. Rickert, *Early English Romances in Verse Done into Modern English: Romances of Friendship*, New York, 1967.
 J.B. Severs, ed., *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1600*, New Haven, 1967.

上記のうち、Duzee と Rickert の著書は、神戸海星女子学院大学教授、吉岡治郎氏のご厚意により拝借したもので、記して謝意を表したい。